

# 一 心 寺

前 田 聽 瑞

時雨るやしぐれぬ中の一心寺——來山——

高き屋に、登りて民の賑ひを、契りおきて難波津に二つこもなき納骨寺のうこつて。、否、全國的の納骨寺としてのこと、坂松山

一心寺は、四天王寺の西門から西へ三町ばかり、松樹の綠さながら南山の壽をなす茶臼山の北、更に西の方遙かに大坂灣を望むところ、こゝは又その昔わが恩聖法然上人が四間四面の草庵を結んで日想觀を修し給ひし荒陵山の新別所、まことわが一心寺は難波津の靈跡、淨土宗徒のメツカ、大大阪の名勝である。

## 二

そのかみ、聖德皇太子の御發願によつて創建せられた四天王寺が、爾來釋迦如來轉法輪所として、はた極樂の東門として全國民の何れもが、この寺に詣でることを、生涯に於ける一つの憧憬としてゐたことは、多くの文献がこれを物語つてゐる。

ところで、法然上人はその御在世中に四天王寺へ御參詣のことがあつたかきうか。四天王寺界限に御留錫のことがあつたかきうか。——さういふ事に關してわれ々は、何一つ精確なことは知つてはゐないのである。

無論さういふ事に關して、われくの想像をさまざまに刺激する幾つかの示唆は『法然上人行狀畫圖』(第十六)の中にも存在してゐない譯ではない。

上人(法然)天王寺におはしけるまき、僧都(明遍)善光寺參詣の事ありけるが、たづね參せられて、まづ使にて案内し給ふに、上人客殿に出まふけて、「これへ」を仰せらる。僧都さしいりて、いまだ居なほらざるほぎに、「このたびいかゞして生死をはなれ候べき」を申されければ、「南無阿彌陀佛を唱へて往生をまぐるには如かずこれ存じ候へ」を仰せられける云云。

示唆は結局示唆に過ぎず、暗示は結局暗示であるが、明遍僧都が或時法然上人の『選擇集』を讀んで、「この書物は少し偏つてゐる處があるわい」を思つて眠りについたその晩に感じた靈夢は、たしかに法然上人の天王寺留錫のこゝ暗示してゐる。以下その靈夢物語(法然上人行狀畫圖第十六)の文を引く。

僧都(明遍)上人(法然)所造の選擇集を披覽して、この書のおもむき、いさゝか偏執なるまゝころありけりとおもひて、寢られたる夜の夢に、天王寺の西門に、病者かすもしらすなやみふせるを、一人の聖ひじの鉢にかゆをいれて、匙をもちて病人の口ごみにいる、ありけり。「誰人にかあらん」をふに、かたはらなる人にこたへて、「法然上人なり」をいふを見てさめぬ。僧都おもはく、われ選擇集を偏執の文なりを思ひつるを、いましめらる、夢なるべし。この上人は機をしり時をしりたる聖にておはしけり。

獨斷の譏をまぬがれぬかも知れぬが、假りに法然上人が天王寺留錫のこゝは事實であるとしても、その時の法然上人がいくつ頃であつたといふ事は、丸で分つてゐない。勿論今日では一般に、文治元年、法然上人は四天王寺々務慈鎮和尚の請に應じて、同寺西門の岸に四間四面の草庵を結び、之を荒陵新別所と稱して、こゝに住し給ふたといふ説が信じられてゐる。その荒陵の新別所といふのが、わが坂松山一心寺の前身なのである。私もひままつこの説を信じてゐる。

然し、この説は、押し詰めて行く。

結局は畫僧古こかん稠ちう（皇紀二三一三）の筆だ三三七七と傳へられてゐる。「一心寺縁起」「並に攝陽群談」なきが典據であるといふ程度のものであるといふことは附け加へて置く必要がある。

### 三

荒陵の新別所が今の坂松山一心寺の前身であることは無論頭から信じてよい。

わが一心寺では春秋二季の彼岸の中日に日想觀にっしやうくわんといふ特殊の宗教的行事を嚴修してゐるが、その起原は一心寺の草創の時を同じくする。當時の天王寺界限は遙かに海波渺茫たる波頭に金色の光彩陸離して没入せんとする落日の莊嚴を拜し、日想觀を修して彌陀の淨土を欣求するには絶好の地勢であつた。謠曲「弱法師」に云ふ。――

ワキ「やあ如何に日想觀を拜み候へ。シテ「けに〜日想觀の時節なるべし。盲目なればそなたさばかり、心あてなる日に向ひて、東門を拜み南無阿彌陀佛。ワキ「何東門なにとうもんとはいはれなや。こゝは西門石の鳥居よ。シテ「あら愚や天王寺の、西門を出で、極樂の、東門に向ふは僻事か。ワキ「けに〜さぞ難波の寺の、西門を出づる石の鳥居、シテ「阿字門に入つて、ワキ「阿字門を出づる、シテ「彌陀の御國も、ワキ極樂の、シテ「東門に向ふ難波の西の海、地「入日の影も舞ふさかや。」

ところで、荒陵新別所の草庵は幸に西に展げ、眺望は遠く大阪灣に擴がり、まことに日想相應の道場であるところから、後白河法皇も、四天王寺五智光院に行幸の砌、鳳輦をこの草庵に躡め給ひ、法然上人と共に親しく日想觀を嚴修せられたと傳へられてゐる。その時、法皇におかせられても、その御感得遊ばした御法悅を詠じ給ひ、上人も亦一首の和

歌にその法悦を洩らしておられる。それ等は、かの「夫木和歌集」に

御製

難波漏入にし日をもながむれば

よしあしにも南無阿彌陀佛。

法然

阿彌陀佛といふより外は津の國の

難波のこもあしかりぬへし。

と録されてゐる。

あ、星霜こゝに七百有餘年、荒陵新別所の名は古りて、坂松の縁愈々青く、一心専念の念佛の聲は愈々清い。坂松山一心寺は念佛である。法然上人である。年時を忘れて永へに清新に、常に清寧陸昌にして却つて回顧の情を深うするではないか。

歴史は老いよ。念佛はここしへに若くあれ！。